ロッテルダム日本人学校における特色ある教育実践と現地理解

前ロッテルダム日本人学校　教諭
兵庫県明石市立江井島中学校　教諭　河　田　武　志

キーワード：在外教育施設、ロッテルダム、英語教育、現地理解教育、オランダサッカー、幸福度

１．はじめに

この度縁あって、ロッテルダム日本人学校で英語教師として、３年間教鞭をとる機会を頂いた。海外生活は様々な意味において刺激的だった。風土、文化、言語、すべてが新鮮。そんな中、のびのびと過ごす子どもたちとの時間は、私のかけがえのない宝物だ。そのロッテルダム日本人学校での教育実践を紹介したい。

２．赴任地（ロッテルダム）について

ロッテルダムは、オランダ第二の都市、人口およそ63万人、オランダ中西部に位置し、ヨーロッパの玄関口である貿易港ユーロポートがある。気候は海洋性で、空気が乾燥し、夏はカラッとしており、冬の雪は少ない。今年は-8℃まで下がり運河が凍ったが、比較的過ごしやすい気候であった。大きな特徴として、海抜０mの地帯では海水を風車でかき出し、干拓地を広げている。山はほとんどなく、様々な表情に変化する大空が広がっている。

歴史のある建造物が残る首都アムステルダムとは違い、ロッテルダムは第二次世界大戦中、ドイツ軍の空襲を受け、町は壊滅状態となった。その後、近代的な建造物が建設され、見事に復活を遂げている。有名な建物としては、ユニークな形をしたキューブハウス（ユースホステル・ミュージアム）や斬新なデザインのマルクトハル（商業施設）などがある。その前の広場では、毎週火曜日・土曜日にマーケットが開かれ、多くの人々でにぎわう。郊外へ出ると、牧草地が広がり、大変のどかな印象をもつ。

主言語はオランダ語である。移民の多い国であるが、移民のオランダ語習得率が非常に高いことは大変興味深い。また、第二言語としてドイツ語・フランス語・英語などを学校で履修する。

日本から来た私達にとっては、オランダ語を身につけるのは大変難しく、日常生活では英語を使用した。スーパー、お店、街中では英語によるコミュニケーションが問題なく行えた。オランダは小さな国であるため、近隣諸国と拮抗してきた。そのため、他言語を学ぶことに抵抗がなく、他国から学び、他国に人材を送り出すことに糸目がない。このように肩に力が入ったプライドがなく、柔軟に近隣諸国と渡り合っていることがオランダの特徴である。

３．赴任校の概要

ロッテルダム日本人学校

本校は、ロッテルダム校外の閑静な住宅街の中にあり、設立母体は在日本商工会議所（JCC）である。校舎は、オランダ王国・ロッテルダム市・インターナショナルスクール（American International School of Rotterdam: AISR）・日本人学校の出資により設立された国際教育センター（International Education Center: IEC）の中にあり、施設をインターナショナルスクールと共有している。平成29年度（2017年度）は、小学部32名・中学部８名・全校生40名が在籍し、小規模校としての特徴をもつ。派遣教員８名、現地採用５名、全教職員13名。小学１・２年及び中学１～３年は単独学級、小学３・４年及び小学５・６年は複式学級を採用。小規模校の長所として、児童生徒一人ひとりに応じた指導が展開できる。交流学習および様々な行事を学校全体で作り上げることができ、子どもにとって、大変やりがいや達成感を味わうことができる。ただ、各授業における児童生徒同士の意見交換の充実や多様性が、大きな課題であり、工夫が求めら

れる。

４．特色ある教育実践

本校の教育目標である「思いやりのある人」「よく考え学びあえる人」「世界に目を開く人」の具現化のために、少人数によるきめ細やかな授業を展開しながら確かな学力の定着を目指し、「コミュニケーション能力の向上（日本語・英語教育の充実）」、「現地理解教育の充実（現地校交流、校外学習）」、「キャリア教育の充実（職場体験・進路指導）」に力を入れ、豊かな国際性を身に付け、21 世紀をたくましく生き抜く児童生徒の育成に取り組んでいる。

(1)「コミュニケーション能力の向上（日本語・英語教育の充実）」

①朝の読書タイムは、全児童生徒が静かに集中して読書。図書室の蔵書数は約 8,500 冊で、パソコンによる図書貸し出しの集中管理を行っている。

②スピーチ発表、話し合い活動、グループ活動を授業に取り入れ、表現力の向上に努めている。

③学校行事や児童会・生徒会活動での進行、発表、話し合い活動を実施し、表現力の向上に努めている。

④日本の伝統的な行事（七夕、節分、餅つき、和太鼓演奏等）を行い、日本の文化について指導をしている。

⑤経験豊富で指導力のあるオランダ人講師が英語（英会話）を担当している。「小学部」1 ～ 4 年週 2 時間の英会話（1 コマ 20 分×週 4 回の指導）5・6 年週 3 時間の英会話「中学部」週 4 時間の英語（週 1 時間オランダ人講師 TT で参加）週 2 時間の英会話（オランダ人講師による 1 コマ 20 分×週 4 回の指導）

⑥体育の水泳を現地スタッフ講師による英語の授業を行っている。

⑦インターナショナルスクール（AISR）と英語による交流授業を実施している。

(2)「現地理解教育の充実（現地校交流、校外学習）」

①交流活動を通して、人とのつながりを大切にする心を育成するとともに、これまで学習してきたコミュニケーション能力（Warm Heart [Smile, Compliment, Welcome & Thanks, Show Interest]）を発揮する実践の場としている。

②オランダ語に慣れ親しむために、校外学習（ハーリング、オリボーレン買い物レッスン）や現地校と交流することから、オランダ人講師による「オランダ語強調週間」を設定し、オランダ語会話の習得に努めている。

③アンネ・フランクを題材とした、人権教育の推進。

④少人数グループによる、風車やチーズなどのオランダ文化の学習。

ハーリングレッスン

(3)「キャリア教育の充実（職場体験・進路指導）」

①職場見学・職場体験、外部講師招聘を通して、将来の夢や職業について考える機会を設け、日蘭の架け橋、国際社会で活躍できる人材育成に努めている。

（講話者：国際裁判官、防衛駐在官、マラリア研究員、バレエ指導員、コメディアン等）

５．現地理解「オランダサッカーに触れて」

オランダサッカーに触れて、地域スポーツの普及および、現地理解を深めた。

(1) オランダのサッカーについて

オランダサッカー協会によると、サッカー人口がおよそ120万人、およそ6,000チームが登録されている。週末になると、オランダ全土でリーグ戦が繰り広げられる。土曜日に行われるリーグ戦や、日曜日に行われるリーグ戦、また協会主催ではないプライベートリーグなど、様々な年代がサッカーを楽しんでいる。それぞれのチームは各地域に根差しており、オランダ国民がサッカーに親しんでいると言える。

カテゴリーがA～Fまであり、Aがいわゆるトップチームである。アマチュアリーグであるものの、プロ顔負けのプレーが繰り広げられる。トップチームの試合では、4€の観戦料が必要となる。最も低い年齢は5歳から。コートはフルピッチではなく、ハーフコートで試合が行われる。カテゴリーD（12、13歳）の試合では、審判員が厳しくジャッジをするのではなく、選手にルールを理解させることを最優先としている。例えば、スローイングではファウルスローを再度やり直させる。また、ゴールキックやコーナーキックでは本来のポイントよりも前でのキックスタートとし、ゲーム展開を面白くさせる工夫がなされていた。初心者には、サッカーを好きにさせるというねらいを大切にしているようだ。

(2) サッカー審判員について

審判員は、クラブに所属している関係者や、サッカー関係者が携わっている。副審は、試合を行うスタッフが務める帯同審判制を採用している。トップチームの試合では、オランダサッカー協会から派遣されるトップレフリーが審判員を務める。誰でも審判ができるようではない。

毎週水曜日にExcelsiorサブグラウンドにて、審判員トレーニング（年間52€）が行われている。30名ほどの審判員が集まり、ランニング等のトレーニングを1時間行う。そのあとは、クラブハウスにて、テレビを使ってトップチームの試合観戦を行い、審判員のジャッジに対してのディスカッションを行うなどして、日々審判員の資質向上を目指している。その審判員たちはそれぞれの活動地域にて、審判活動を行っている。年齢層は10代～70代の幅広い年齢層の人が参加している。

(3) サッカー選手としてオランダサッカーに触れて

平成29年には、私自分自身がオランダのアムステルフェーンにある、日本人だけで組織したチームに所属し、オランダ人チームとホームアンドアウエー方式でサッカーリーグを戦った。その時に、感じたことを綴りたい。

オランダ人は体格が大きく、ボールを奪いにくるときの当たりが強烈である。体格が大きいからといって、動作が遅いかというと、そうではなく、ボールを保持した時の判断の速さやプレーの正確性が、日本人と各段に違う。おそらく、この違いは、海外で活躍するプロのサッカー選手でも同じことを感じたはずだ。そういった質の高い中で、選手同士が切磋琢磨することで、より質の高いプレーが可能となるのだろう。そして、どの年齢においても、サッカーを心から楽しんでいる。日本では、部活熱があり、活発にスポーツに勤しんでいるが、スポーツ嫌いを増やしている節があるのは否めない。そこについては、日本人の幸福度において大きく関わっているように感じる。オランダのサッカーで感じたことや学んだことを、サッカー選手として、そしてサッカー指導者として、自分の心に刻み、これから日本のサッカーに関わっていきたい。

(4) サッカー以外のスポーツについて

オランダでは、サッカー以外にも、様々なスポーツが行われている。硬式テニス、バドミントン、バレーボール、バスケットボール、アイススケート、屋内スキー、スイミング、乗馬、サイクリング、ジョギング、マラソン。サッカーの次に根強いスポーツがホッケーである。サッカーの指導者もホッケーの試合を観戦し、ホッケーの戦術からサッカーに取り入れるなど様々な工夫がなされている。

日本と異なる点は、あくせく仕事を頑張るのではなく、仕事はほどほどにし、家族との時間を大切にする。そして、スポーツを通して家族の絆がさらに深まる。年頃の人だけがスポーツを楽しむのではなく、年配の方（定

年退職）も毎週運動をし、日々の生活を楽しまれている。そうした習慣、それを実現できる環境が、オランダに住んでいる人々の幸福度の向上に大きく関係していると考える。仕事・家族・余暇のバランスがよく、とても理にかなったシステムが作られている。

６．研究テーマ「オランダ教育―幸福度の高い秘訣とは？」

ユニセフの調査によると、オランダの子どもの幸福度は先進国29ヵ国の中で最も高い。またオランダの子どもは数値が客観的に高いだけでなく、子ども自身も95％が幸福だと感じている。日本の1.5倍あるといわれる、オランダ国民の学力や労働生産性の秘訣を研究テーマとして、3年間考察に努めた。

幸福度の高い理由として第1に挙げられるのは、「社会制度の充実」が挙げられる。「教育の自由化」が進んでいるため、移民を含めて、質の高い教育を受けることができる。そして、「医療保障制度」や「雇用」が充実しているため、不安を抱えずに、日常生活を送れる等、「理想的な社会制度」である。第2に、個人の「心の在り方」である。幼少期から子どもを社会全体が大切に育てており、個々のアイデンティティを大切にし、一人ひとりの大人が自尊感情を高めている。そうした個の捉え方で子どもの成長が大きく変わる。第3に、「多様性と創造性」である。先進国の中でも、小国としての立場を最大限に生かし、外へ出ること外部から取り入れることに抵抗がなく、多様性が受け入れられている。そして、創造力を大切にし、新たに画期的なことを生み出すことができる無限の可能性を秘めている。

上記の3点において、幸せと感じる度合いや幸福度の質が日本に比べて高いと考える。この気づきをもとに、日本の良いところはこれからも大切にし、変えていくべきところは、我々大人が見極め、改革を図る必要性がある。いずれにせよ、オランダ人や日本人にとって、生きる上での最高の目標は、「幸せに生きる」ことである。これからの教育現場では、一人ひとりの存在意義を子どもにもたせ、自立型人間の育成を目指したい。

７．おわりに

オランダに派遣され、ロッテルダム日本人学校の子どもたちと接することができて、本当に幸せだった。全校児童生徒数50名に満たない小さな学校であったが、そこは夢や希望をいっぱいに抱いた子どもたちと、その子どもたちのために全身全霊をかけて働く教職員が日々集う、活気に満ち溢れた場所だった。この経験を日本の子どもたちに還元するとともに、日本での教育活動に邁進したい。